「パンは人のためにならず」

―初稿―

2024/12/18

雨森　れに

〈人物表〉

安藤　つむぎ　（４２）　パン屋のおかみさん
安藤　勇気　（４２）　パン屋の主人
寺沢　タエコ　（１２）　フィリピン人のハーフ。中学生
安藤　タエコ　（１７）　５年後のタエコ。安藤家の養子

〈ログライン〉

子供に恵まれなかったパン屋のつむぎが、ネグレクトされているタエコを目撃し、同情心からパンを与え、最終的に自分の養子にする。

〈ねらい〉

・テーマ触媒：ことわざ
情けは人のためにならず
意味　人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがてはよい報いとなって自分にもどってくる

1.

パン屋・外観（朝）

こぢんまりとした、町のパン屋。
まだ朝陽も昇らない早朝で、雪がちらついている。

2.

パン屋・厨房（朝）

オーブンからパンを取り出す安藤つむぎ（４２）。
次々と天板を取り出し、新しいものをセットする。

3.

パン屋・店内（朝）

つむぎ、朝陽が差し込む窓辺のトレーにパンを並べる。
気配を感じて、外を見る。
夏の制服に男物のジャンパーを羽織った少女がいる。
寺沢タエコ（１２）である。
タエコがスナック「ベンジャミン」の前に座り込む。
ベンジャミンから女性が出てきて、タエコに千円札を投げつける。
つむぎ、思わず非難めいた声をあげる。
安藤勇樹（４０）がそれに気づき、

勇樹　「どした」
つむぎ「よくこの辺うろついてる女の子。ほら、外人っぽい子」
勇樹　「あぁ、あの子」
つむぎ「なんか、スナックから出てきた女にお金投げつけられてさ」
勇樹　「あー。ほんとだ。多分母親なんだろうけど、ひどいことするよ」
つむぎ「この寒いのに夏の制服だし。あの親、おかしいんじゃないの」
勇樹　「文化の違いなんかね。フィリピン人ってみんなああなのかな」
つむぎ「ああもう。あの子、手がかじかんじゃってるわ。お金拾えてない」
つむぎが店を出ようとする。
それを勇樹が制する。

勇樹　「拾ってやって、どうするんだよ」
つむぎ「どうって」
勇樹　「お前のことだから、他にもやってやりたくなるだろ。俺たちにそんな余裕ないだろ？」
つむぎ「子供が苦しんでるのに、余裕もへったくれもないでしょうが！」
つむぎが店の外へ出ていく。

4.

パン屋・外（朝）

つむぎ「ちょっとアンタ」
つむぎが近づこうとする。
タエコ、驚いて立ち上がる。手には千円札が1枚。
地面にもう1枚落ちている。
タエコ「ご、ごめんなさい！」
タエコ、走り去る。
つむぎ「怒ってないから！　待って、お金！」
つむぎが千円札を拾う。
小さくなったタエコの後ろ姿を見て、困り顔。
勇樹　「あんな言い方したら怒られるって思うって」
つむぎ「あんなって。普通にしたつもりだったのに……」
勇樹　「そもそも顔がおっかないし」
つむぎ「（ため息）次は気を付けてみるわ」
勇樹　「ほどほどにしとけよ」
勇樹、店の中へ戻る。
つむぎは反対されなかったことに気づく。微笑みを浮かべ、勇樹の後を追う。

5.

パン屋・店内（夜）

つむぎがパンのトレーを拭いている。
ふと窓の外を見ると、タエコらしき姿。
慌ててレジを開け、「あの子の」と書かれたポチ袋を掴む。
扉を開けるが、夜道にタエコの姿はない。
深いため息をつく。

勇樹　「あの子？」
つむぎ「いたと思ったんだけど」
勇樹　「今日お客さんが話してたよ。ベンジャミンのママの娘だって」
つむぎ「やっぱそうなんだ」
勇樹　「何度か児相が来てるらしい」
つむぎ「なんで保護されないんだろうね……可哀想に」
つむぎ、タエコを探すように、窓の外を見つめる。

6.

パン屋・店内（朝）

つむぎ、パンを並べながら、窓の外を見ている。
つむぎ「来た」
タエコが歩いている。
ポチ袋を掴み、店の外へ。

7.

パン屋・外（朝）

つむぎがタエコに声をかける。
つむぎ「ねえ、アンタ」
タエコ「（驚いて）は、はい！」
タエコの目は腫れ、寒さで震えている。
つむぎ、寒そうなタエコの様子に眉をひそめる。
タエコ「ご、ごめんなさい……」
つむぎ「あ、おばちゃん怒ってないからね。アンタにこれ渡したくて、声かけたんだよ」
ポチ袋を差し出す。
タエコが不思議そうにしながら、中身を見る。
タエコ「こ、これって……？」
つむぎ「昨日忘れていったでしょ」
タエコ「あ、昨日の……あの、拾ってくれて、ありがとうございます」
タエコが恥ずかしそうにポチ袋を見つめる。
つむぎ、ポチ袋に書いてある「あの子の」という文字をさして、
つむぎ「そんな書き方してごめんね。名前、わからなかったから」

タエコわたし、寺沢です。寺沢タエコ……」
タエコの表情に影が落ちる。
つむぎ「どうしたの？　いい名前じゃない」
タエコ、どう答えればいいかわからず狼狽える。
つむぎ「言いたくない事は言わないでいいんだよ。それで、タエコちゃん。物は相談なんだけど、おなかすいてない？」
タエコがつむぎを見上げる。
つむぎ「おばちゃんち、そこのパン屋なんだけどね。売り物にならないパンが出ちゃったから貰ってほしいんだよね」
つむぎ、困ったなぁというように頬に手を当てる。
つむぎ「寄ってかない？」
タエコ「わたしでいいんですか？」
つむぎ「もちろん。おいで」
つむぎはタエコの手を取り、店内へ。

8.

パン屋・厨房（朝）

タエコが、厨房の隅で椅子に座っている。
つむぎ、総菜パンをいくつか乗せたトレーをタエコに差し出す。
つむぎ「どうぞ。遠慮しちゃだめだよ」
タエコ「すごい。まだあったかい。焼きたて食べるの初めて……」
タエコがおそるおそるクリームパンをかじる。
タエコ「わぁ。スーパーのとぜんぜん違う」
つむぎ「比べちゃスーパーが可哀想だ」
勇樹　「俺の腕がいいって言えよ」
勇樹が奥からぬっと出てくる。
タエコは勇樹の存在に驚き、喉を詰まらせそうになる。
つむぎ「ほら水、飲みな！　アンタも急に顔出しちゃ驚くだろ！　気ぃつかいな！」
勇樹　「ごめんなぁ。そんなつもりじゃなかったんだけどさ」
タエコ「ぜ、ぜんぜん大丈夫です！　こんなにおいしいパン食べさせてくれてありがとうございます！」
勇樹、にっこりと笑う。

勇樹　「なぁ。売れないパンって、毎日出るよなぁ？」
つむぎ「（にやっとして）そうだね。５，６個は確実にあるね」
勇樹　「それに、俺は俺のパンを褒めてくれる人が大好きだよな」
つむぎ「そういう人に食べてほしいよね。だから、タエコちゃんが貰ってくれると嬉しいんだけどなぁ」
タエコ「わたしが？」
つむぎ「うん。嫌じゃなければ、毎日おいで」
タエコ「迷惑にならない？」
勇樹　「ならないよ」
タエコ「……うん」
つむぎがタエコの背中をさする。
つむぎ「ほら、食べちゃいな」
タエコは頷き、パンを食べる。
つむぎと勇気が、その様子を優しい目で見る。

9.

パン屋・外観（朝）

安藤タエコ（17）がパン屋の窓を拭きあげている。
つむぎ「タエコ、寒くない？」
タエコ「寒くても、この窓が汚れてちゃパンが美味しそうに見えないでしょ」
つむぎ「ふふ、ありがとね」
タエコ「お母さんこそ寒いから中入ってなよ。また関節痛くなるよ」
つむぎ「はいはい。一言多いんだから」
タエコ「あ、今日はクリームパンと卵サンドがいい！」
つむぎ「お父さんに言っとく」
窓を拭く手に力が入る。
タエコの顔は晴れやかである。
×　×　×
「ベンジャミン」に空きテナントの張り紙。風に揺れて、飛ばされそうになっている。

おわり